

現代的教養とは何か

正慶 孝*

ミルのことば

東宮御学問所の御用掛を始めとして教育界の要職を歴任した杉浦重剛は、『杉浦重剛座談録』のなかで、西洋軒でのなにかの会合の際、出席者の署名をもとめられたので、次のような文句を書いたとのべている。⁽¹⁾

……餘白が二行ばかりあつたので小村侯が始終言つた文句の「I know everything of something and something of everything」といふのを書いて来た。文學者が大勢居たのでこの出所をきいて見たが、誰も知らなかつた。

小村寿太郎侯爵が始終いっていたというこの文句は、英国の思想家・経済学者ジョン・ステュアート・ミルのことばである。学校に行くかわりに家庭で父親から早期英才教育を受け、経済学や社会思想に大きな足

跡をのこしたミルは、みずからの体験に則して専門教育の重要性に劣らず、教養教育の重要性を力説して、上記の文句を口にしたのである。

前の句の something は特定の専門科目を、後の句の everything は一般教養科目を、それぞれ意味している。この両者を等しく修得することを教育、特に高等教育の目標だとミルはいたのである。この文句を愛唱したのは、ひとり小村だけではなかつた。外交官としてポーツマスの日露の談判をまとめた小村と優らずとも劣らない外交手腕をもち、教育者としてもすぐれた業績をのこした新渡戸稲造も、この文句を愛唱した。新渡戸の愛弟子での中に新制東大の初代教養学部長に就任した矢内原忠雄は、この文句を学生たちにしばしば説いたと伝えられている。

明治、大正、昭和と日本のすぐれた教育者によって連綿として伝えられているこの文句は、今日でもけっして無用のことばではないであろう。日本で教養教育の問題が提起される度にまず思い出されるのは、このミルの文句である。

幕末のオランダ人の指摘

戦後の高等教育の最大の特徴をあげると、かぎりない大衆化の進展である。『文部省年報』によると、現在とよく似た経済状況にあった世界大不況期の昭和五年当時の大学卒業生の数は、僅かに一万百三十四人であった。この数字は同世代のパーセントにしか過ぎない。この数字は、戦後の新制大学発足時まで大きな変化はなかつた。これに対し、現在では同一年齢層の約半数の若者が大学に進学している。現在の高等教育は一部少数エリートのものではなく、一般大衆に対するものであることが、この数字からもうなづかれるはずである。このように、同世代の人口の

約半数が大学に進学するという、大学進学がいわば準義務教育化している現在、大学教育は、それまでのように、「國家ノ須要ニ應ズル學術技藝ヲ教授シ及び其ノ蘊奥ヲ攻究スル」(帝国大学令)というような目的ではなく、市民的な一般教養を修得するという、戦前とは異なった社会的要請にこたえうるものにならざるをえないのは、これまた当然のことであろう。

戦前の高等専門学校以上の高等教育機関は、少数の学生に対する専門的職業教育に偏向していた。明治政府の発足以降、「欧米に追いつけ追いつ越せ」(catch-up)を国家目標とした日本のそれは宿命でもあった。一日も早く工業技術者をつくる、一日もはやく企業経営のわかる簿記係をつくるという等々の宿命をもった日本は、大学のほかに高等工業、高等商業、高等農林等々の専門学校を各地につくり、社会の要請あるいは時代の要請に応えた。戦前においては、大学に進学することのできる高等学校や大学予科の学生のみが、文学や哲学に親しむというような比較的余裕のある教養生活を享受することができた。専門的職業教育の成果には大きなものがあつたが、同時にそれは教養教育を比較的軽視するという傾向を生まなかつたというわけにはいかなかつた。

もっとも、教養教育軽視の風潮は、明治以前から外国人によって指摘されていることでもある。幕末に日本にやってきたオランダの海軍士官で長崎の海軍伝習所で教えたカッテンディーケ中尉は『長崎海軍伝習所の日々』のなかで、次のようなことをいっている。⁽²⁾

……海軍士官としては自己の専攻課目のほかに一般教養として何でも一通り覚えておくべきであると思うのに、日本の学生は「拙者は運転の技術は教わっているが操練はやらぬ」とか、「拙者は砲術、造船および馬術を学んでいるのだ」というふうで、勝手気儘な考えで勉

強をしている。つまり本当に知識・技術を探求するという「無限探求の精神」が一般学生に欠如している。

科学革命と教養

カッテンディーケ中尉の指摘は、残念ながらもなお、つづいてい

るのではないであろうか。「本当に知識・技術を探求する」という「無限探求の精神」は、おそらく近代ヨーロッパ人の典型である『ファウスト』のように無限に物事を探求しようとする精神の現われである。ゲルテは、『ファウスト』に次のように語らせている。⁽³⁾

一體此世界を奥の奥で統べてゐるのは何か。
それが知りたい。そこで働いてゐる一切の力、一切の種子は何か。
それが見たい。

ヨーロッパの近代精神は、オズワルド・シュペングレーが『西洋の没落』のなかでのべているように、この『ファウスト』という人物に典型的に表現されている性格・心理・行動様式である。何事も徹底的に奥の奥まで執拗に追求しようとする「無限探求の精神」こそ、ヨーロッパをヨーロッパたらしめた最大の要因であつた。この精神が学問の分野で表現されたものが、近代科学である。その近代科学の源泉がギリシア、中国、アラビアなどのいずれにあろうとも、それまでの科学的知識を整備し、体系化し、実証的なものにしていったのは、近代ヨーロッパであつたことは否定することができないであろう。

特に十七世紀の科学革命は、世界史の上で決定的な画期となつた。この「科学革命」の時代は、天才の世紀であつた。ガリレオ・ガリレイ、

ヨハネス・ケプラー、クリスティアン・ホイヘンス、フランシス・ベーコン、ルネ・デカルト、ブレーズ・パスカル、サー・アイザック・ニュートン、G・W・ライブニッツなどの天才が集中的に輩出し、こんにちの科学技術の基礎が築かれたのが十七世紀である。

この時代のことをジェルミー・リフキンは、次のようにのべている。⁽⁴⁾
 ベーコンが扉を開き、デカルトが土台を作ったとすれば、ニュートンは、店を開業するのに必要なすべての道具類を持ち込んできたといえよう。

リフキンのいうように、「科学革命」の時代の代表的人物は、ベーコン(一五六一―一六二六)、デカルト(一五九六―一六六〇)、そしてニュートン(一六四二―一七二七)であった。この三人のうち最初に登場する人物であるベーコンは、王立科学協会の設立を提案し、この提案に応えてチャールズ二世は、一六六二年に王立科学協会を設立している。国家が科学研究に本格的な援助を与える体制がここに確立したのである。天才たちが次々と登場し、科学的研究のはじまったこの時代は、前期資本主義的な動きと、そのことが要求する新しい動きがあった時代である。「必要は発明の母」という諺があるけれども、学問もまた、必要に応じて「発明」される。この時代の物理学も、その後に興隆することになる経済学、社会学、文化人類学などの社会科学も、また、精神分析なども、「必要」に応じて「発明」された学問であった。

いずれにせよ、十七世紀の「科学革命」によって新しい世界観が誕生したのである。このことに関し、リフキンは、次のようにいう。⁽⁵⁾

……啓蒙期全般にわたる世界観は、ニュートン力学、デカルトの数学、そしてベーコンの科学的方法論の三つの原理が引き金となったも

のである。……

しかも、この三つの原理の中心となっているのが、観察(科学的な方法)の絶対的不可逆性、そしてすべての過程(普遍的数学と力学的過程)の絶対的不可逆性という観念である。しかし現実の世界では、二度と同じ方法で観察可能なものではなく、一度生じたものは、再び元へ戻ることができない。物理的現実はすべて一つの方向にしか展開せず、また数学ではプラスに対してマイナスがなくてはならないが、われわれを取り巻く世界の物理的現実のなかには、こうした不可逆性はない――、こう教えているのが「エントロピーの法則」なのである。

啓蒙の時代は、同時に機械的世界観の成立した時代であった。リフキンは、つづけて次のようにいう。⁽⁶⁾

現代は機械化時代である。精密、スピード、正確という言葉が第一に尊ばれる。われわれは、「どれだけ速く進むのか」とか「どのくらい時間がかかるのか」という問いを常に発し、しかもこの質問が永遠の大問題であるかのように信じ込んでいる。しかし実際のところは、目下、それでうまくいっているだけにすぎず、機械のからくりが素晴らしいからといって、この機械化時代に問題がないと言うのは、お世辞が過ぎるというものだろう。

二つの文化の対立

機械的世界観が成立して以来の教養は、それまでの社会を支配してきた人文的教養と補完的でもあり、対立的でもあるメカニカル・アーツ(機械学芸)とよばれるものが重要視されるようになった。C・P・ス

ノーは、『二つの文化と科学革命』のなかで、リベラル・アーツ (liberal arts) とメカニカル・アーツ (mechanical arts) の不幸な対立を描いている。今日、リベラル・アーツの代表的人物は文学者で、メカニカル・アーツの代表的人物は物理学者である。スノーは、このすべて⁽⁷⁾いる。

文学的知識人を一方の極として、他方の極には科学者、しかもその代表的な人物として物理学者がいる。そしてこの二つの間をお互いの無理解、ときには(若い人たちの間では) 敵意と嫌悪の溝が隔てている。だが、もっとも大きいことは、お互いに理解しようとしな⁽⁸⁾いことだ。

この二つの文化の対立が生まれたのは、おそらく近代科学の誕生以来のことであると思われる。よく知られているように、リベラル・アーツは自由な人間に相応しい学問という意味である。liberal arts の liberal はラテン語の liberalis (自由な人間) から出ており、職業や仕事から解放されている人びとの自由な学問・教養という意味がある。これに対し、メカニカル・アーツは、奴隷に必要な学芸という意味である。いいかえれば、リベラル・アーツとは、士大夫の学問であり、方技の学問であるメカニカル・アーツは、それ以外の人の学問ということになるであろう。

科学革命の最初の端緒となった天文学は、中世の学問としてはリベラル・アーツの一学科ではあった。その後の経済社会の発展は、メカニカル・アーツの優勢のままにすすんできた。このことを決定的にしたのは、十八世紀にイギリスから始まる産業革命であった。ふたたびスノーを引くと、次のようにいう⁽⁸⁾。

科学的文化に属する人びとを除いては、西欧の知識人は産業革命を理解しようと試みもしなければ望みもせず、またできもしなかった。ましてそれを受けられるはずもなかった。知識人、とくに文学的知識人は生まれながらのラダイト⁽⁹⁾(産業革命において機械は失業の原因だと誤信して機械破壊の暴動を起した職工団員) だった。

産業革命は、人類の歴史を決定的に変えた大きな出来事であった。しかし、生まれながらのラダイトである文学的知識人は、何事が起きたのか正確な理解はできなかった。ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリス、デヴィッド・ソロー、ラルフ・ウォルド・エマーソンなどの著作が物語っているように、かれらは産業革命におののいたり、悲鳴をあげたりしても、それが人間の生活にどのような影響をもたらすのか、正しい認識はできなかった。ソローやエマーソンのように自然の生活を讃美したり、ラスキンやモリスのようにクラフトマンシップを尊重することは大切であっても、産業革命以後、それは「対抗文化」(カウンター・カルチャー) にすぎなくなっていく。一九六八年以降の「ユース・クォーク」(若者の反乱) で、「ラブ・アンド・ピース」(愛と平和) をとねえた若者たちの愛読書の一つがソローの『ウォールデン』であったことは象徴的である。エスタブリッシュメント(既成制度) あるいは支配文化は、反自然的な産業文化であり、産業革命以後に成立し、こんにちますます強固なものになっていると、彼らは批判したのである。

さらに、新しい科学革命の進行は、この事態をますます複雑なものにしていく。現在進行中の科学革命は、電子技術社会である。一般的に現代の技術の原理について、エーリッヒ・フロムは著書『希望の革命』のなかで、次のようにいう⁽⁹⁾。

……第一の原理は、何かをすることが技術的に可能であるから、それを行なわなければならないという原理である。核兵器を作ることが可能なら、たとえ私たちが皆が破滅することになって、それは作られなければならない。月や惑星に旅行することが可能なら、たとえ地上の多くの必要を満たすことを犠牲にしても、それはなされなければならない。この原理は人間主義の伝統が育ててきたすべての価値の否定を意味する。……

第二の原理は最大の効率と生産の原理である。最大の要請は、結果的には最小の個性の要請につながる。個々の人間を完全に量化できる単位に還元して、そのパーソナリティをパンチカードに表わすことができるなら、社会機構はいっそう効率よく働く信じられている。こういう単位は故障を起したり摩擦を生じたりすることがないので、いっそう容易に官僚制の規則によって管理することができる。このような結果に達するためには、人間は個性を奪われ、自分自身の中よりもむしろ団体の中に自己の同一性を見いだすように、教えられなければならない。

フロムのいうように、人間主義の放棄と自己同一性の除去が、電子技術社会の主要特徴で、このことは同時にリベラル・アーツの放棄をも意味している。リベラル・アーツの背景にある個人の尊重と自己実現の達成という目標と、電子技術社会の目指す方向とは逆であるからである。

前述のユース・クォークの発端のひとつとなったのはナンテールのソルボンヌ分校での出来事であった。その出来事は、女子寮に男子学生がいてもらえないことから起こったという。管理に対する反抗がその発端となって大きな社会的出来事になっていったこの動きが示しているよ

うに「revolt (反抗)」、rebellion (反乱)」、liberation (解放)」、revolution (革命)」などのこの時期にしばしば用いられた言葉は、じつに些細なことから生じたのであった。

十七世紀の科学革命の担い手たちは、リベラル・アーツもメカニカル・アーツもマスターしたルネサンス型の「普遍的人間」(ホモ・ウニヴェルサリス)であった。かれらには、文科的教養も理科的教養も同じものにつつまれた。そこには何らの矛盾もなかった。ところが、産業革命以降、文化はますます分化し、教養も職業も細分化され、全体を結びつけるヒューマニズムの観念が薄れてしまっている。

十八世紀のアダム・スミスが、ピン製造を例にして経済成長を達成する手段として分業をあげたことは、象徴的である。分業は生産性の向上と効率の達成にはかせないけれども、それは同時に大きな犠牲を伴わざるをえない。作業を細分化することから、全人的人間を部分的人間にかえてしまうことになりやすい。教養も分断化された教養という跼蹐したものになってしまふことは必至である。このことに関し、アメリカ合衆国の大学では、学部教育は主として教養教育に重点がおかれ、専門教育がビジネス・スクールやロー・スクールなどの大学院におかれていることは、重要な示唆をあたえてくれる。

大転換の時代

現代は、「大転換」(great transformation)の時代である。転換期には、科学や技術の領域では、次々に新しいパラダイムが登場する。また、新しいライフ・スタイルも生まれている。この新しい転換を「工業社会」から「工業後社会」(post-industrial society)への大転換ととら

えたのは、ダニエル・ベルであった。ダニエル・ベルによると、「工業後社会」は、次の五つの次元（構成要因）からなる。⁽¹⁰⁾

- (1) 経済部門……財貨生産経済からサービス経済への移行
- (2) 職業分布……専門職・技術職階層の優位
- (3) 基軸原理……技術革新の政策策定の根幹としての理論的知識の社会における中心性
- (4) 将来の方向づけ……技術管理と技術評価
- (5) 意思決定……新しい知的技術の創造

ただし、この社会変動は、厳密には技術・経済領域での変化に限定されるべきである、とベルはのべている。

ベルの指摘のように、「工業後社会」は、すでに現在進行形である。サービス経済化の進行、エレクトロニクス関連のインテレクトラチュアル・ワーカー（知的労働者）の不足などが現実になっており、「新しい社会」は、「工業後社会」として形成されつつある。この「工業後社会」に相当する『電子技術時代』（テクノトロニック・エラ）を提唱したのは、ズビクニュー・ブレゼンスキイであった。また、アルビン・トフラーも、新しい社会への移行をかれのいう「第二の波」（ベルの工業社会に相当）から『第三の波』への転換と把握した。いずれも、エレクトロニクスの発達によってもたらされる新しい社会のことを強調していることでは、類似の概念である。このような新しい社会の動きは、二十世紀の特徴である。

二十世紀は、人間拡張の原理が大いに発現した世紀であった。一例を挙げよう。二十世紀の初頭の一九〇三年、オルヴィルおよびウィルバーのライト兄弟によってなされた飛行機の試験飛行は、鳥のように大空を

自由にかげめぐりたいという人間の欲求を実現したものであった。それが六十六年後の一九六九年には月にまで人間を到達させることができるようになる航空宇宙への旅の第一歩であると、果してそれが想像したであろうか。

また、遠くで起きた出来事を現場に赴かなくとも知りたいという欲求は、ラジオやテレビジョンの発明となり、それが通信衛星を使っての今日みられるようなさまざまなテレコミュニケーションの盛行につながっていることを、予想しえた識者がいたであろうか。

さらには、われわれは、それまでの世紀には考えられもしなかった新しく合成された物質にとりかこまれて生活している。プラスチック、ニューセラミックス、合成繊維などは、天然資源の制約から人類を解き放った。そればかりではない。われわれは第三の火ともいべき原子力というエネルギーを手にして、その利用に腐心している。

人間それ自体も操作の対象になっている。遺伝子を通しての生命操作の時代、遺伝子工学の時代に突入している。生命の操作ばかりではない。医学の分野ではクローン人間、臓器移植、精液銀行、代理妻などの分野で新たな問題を提起していることは、よく知られているとおりである。

前述のフロムの指摘しているように、現代科学技術の第一の原理である「何かをすることが技術的に可能であるから、それを行なわなければならない」という原理によって、現在の科学技術は進行している。「生命倫理」（バイオエシックス）は、しばしば主張されるけれども、制度のなかにビルトインされているとは必ずしもいえない。メカニカル・アーツがリベラル・アーツを軽視して、ドンドン先行しているのが現状である。

しかし、二十世紀は、リベラル・アーツの面でも革命的な世紀であっ

た。正確には十九世紀の最後の年に、ジグムント・フロイトが『夢解釈』を上梓し、精神分析学の歴史が始まっている。この年、「神は死んだ！」と叫んだフリードリッヒ・ニーチェが死んだ年でもある。これは二十世紀がどのような世紀であるかを、予告的に示している出来事であった。すなわち、神が死んだ後には、人間は道徳律廃棄論者になってしまふということである。フロイトによる精神分析学の誕生、「ホモ・セクスアリス」としての人間の再発見は、人間は常に合理的に行動する動物であるという神話を木っ端微塵に打ち砕いてしまった。一方における知性の発現である発見・発明・革新は、生活水準の向上や医療の改善に貢献したのに対し、他方においては、理性の腐蝕・崩壊を生み、アイシユヴィッツ、ヒロシマ、ナガサキなどにみられるように人間の攻撃性の現われであるネクロフィリア（死体愛好症）のおそろしい発現がみられたのが二十世紀の正負の両面である。

こうした不幸な惨劇が起さるのには、リベラル・アーツとメカニカル・アーツのバランスがうまくとれないことにもよるのである。「何かすることが技術的に可能であるから、それをこなさなければならぬ」という論理は、テクノクラシーの論理である。このテクノクラシーの論理が科学技術の暴走を誘発するからである。テクノクラシーとは「技術家政治、テクノクラシー（技術家に一国の産業的資源の支配・統制を委ねようとする思想）」（研究社『新英和中辞典』）のことである。産業的資源の支配・統制を委ねることの実質的な意味は、「統治するものが、専門技術者に訴えて自らを正当化し、専門技術者はまた、科学知識に訴えて自らを正当化する社会」（シオドア・ローザック）のことである。⁽¹¹⁾

新しい魔女の登場

以上のように、現代社会は、テクノクラシー支配・テクノクラシー万能であることは、多くの人の認めるところであろう。前述のパリの学生による「コンテスタション」（異議申し立て）のひとつに教室の壁に書かれた「デカルトを殺せ！」の文句があった。これは注目すべき指摘である。かれらコンテスタトル（異議申し立て分子）が、近代合理主義の帰結として、テクノクラシーがあることを的確に指摘したフレーズが、この文句であり、テクノクラシーは、デカルトを鼻祖とする近代合理主義から始まっていること、その合理主義は官僚主義・機能主義を意味すること、その思想にもとづいてエスタブリッシュメントが形成されていることなどを意味しているからである。

対抗文化は、反デカルト的であり反合理主義的である。デカルト的な世界の頂点は、ルイス・マンフォードのいうメガ・マシン（巨大機構）ともよばれる巨大国家を招来する。⁽¹²⁾ 現代世界は、国家だけではなく、企業も科学技術体系も巨大化している。big government（巨大政府）、big business（巨大企業）、big technology（巨大技術）などの大規模化は、今日の社会の特徴である。当然、そのような巨大システムのなかでは、個々の人間に対する配慮はほとんどされなくなき、個々の人間はたんなる『組織の中の人間』（W・H・ホワイト・ジュニア）の一員でしかない。アブラハム・マズローのいうような「自己実現」は、幻想にすぎない。このような巨大趣味の状況のなかでは、人びとは自己疎外から解放されることはない。このテーマをアレゴリー小説として表現したのは、フランツ・カフカの『変身』やアルペール・カミュの『シ

ーシュポスの神話』などの現代小説であることは指摘するまでもないであろう。

対抗文化は、「理神」(Deism)に対するプロテスタント運動であった。神はとくに死んでしまったが、理神はいまだに死んではいない。かつて、マックス・ヴェーバーは、現代の特徴を「魔術からの世界の解放」(Entzauberung der Welt) といひ、現代の特徴を「合理化」に求めたことがある。たしかに中世的な魔術・妖術・呪術などとよばれる中世的なものではなくて、あるところでは、新しいテクノロジーとよばれる「魔術」が出現し、かつての魔女に代わってテクノクラートとよばれる新しい「魔女」によって、現代社会は支配されているのである。

これがファシズム、全体主義、超国家主義と結びつくとき、狂気が目を覚まし、理性に大量虐殺の命令を下す。二十世紀は「人口爆発」の世紀であったが、同時に大量の生命が暴力的に奪われていった「人口虐殺」の世紀であった。二度の世界大戦、革命、内乱、肅清、テロリズム等々によって、あるいは、飢餓によって、また「ボグロム」によって大量多数のかけがえない生命が奪われた。二十世紀の「ペスト」(感染症)とは、人間の暴力によって起こる大量死(メガ・デス)のことにはかならないのである。

先きのべた3Bで表わすことのできる大規模化は、計算(computation)、通信(communication)、制御(control)の技術が発達によって可能となる。すなわち、3Bは3Cによって始めて可能となるのである。この3Cを要約的にいえば、サイバネティクス(cybernetics)ということになる。

しかし、この結果、個人個人の紐帯が失しなわれるという原子化(atomization)、無関心(apathy)、アノミー(anomie)がすすむという

事態になっている。現代社会においては、個人個人が分断化され、かつてのコミュニティ社会のような社会的連帯は失しなわれ市民的協力もみせかけだけの『孤独な群衆』となっているのが特徴的である。ダヴィッド・リースマンの『孤独な群衆』は、大衆社会の進行によってバラバラにされた「原子化された個人」のことである。現代の産業社会においては、人びとは分断され、コミュニティは喪失させられて、「甲羅を失した蟹」(マンハイム)のようになってしまふ。その上、自由な競争的秩序のもとで個人個人は最大限に対立させられる仕組になっている。各人は自然淘汰と適者生存のダーウィンのなメリットクラシーの論理が暴力的に貫徹している世界に生きてるのである。

このような個人の「原子化」は、個人をひとつの巨大なシステムの極小な基本単位(モジュール)としかみない近代産業社会の一大特徴なのである。このアトミゼーションの現象は、個人内部の分断によってさまざまなテーマに対する無関心(アパシー)を生み、さらには道德的倫理的頹廢の風潮とあいまって、逸脱行動(アノミー的逸脱)に赴きやすい。この単純な形態が「ドラッグ文化」である。このドラッグ文化には「麻薬(narcotic drug)文化」と、「サイケデリック・ドラッグ(psychedellic drug)」文化あるいは「意識拡大剤」文化がある。麻薬吸片者あるいは覚醒剤常用者の増大は、先進工業社会の共通の悩みとなっているけれども、これは管理社会の進行と密接なかかわり合いをもっている。前述のE・フロムは『自由からの逃走』の続編として『正気の社会』を著わしている。この『正気の社会』とは、「ニューロティック・ソサエティ」(神経症を病む社会)のことである。

アパシーの最大のものとは政治的無関心層の増大である。また、アノミーの増大の現象は逸脱行動あるいは社会的病理の増加となって現われて

いる。

このように、メガマシン（巨大機構）化の進行は、個々の人間をメガマシンに奉仕する卑小なパーツに変えてしまう。古代エジプトの奴隷たちが大量に動員されてピラミッドを建設するという苦役に従事したように、現代の労働者のなかには、メガマシンの巨大な管理・監視体系に組み込まれ苦役に従事していると感じる人びとが増えているのである。現代人は無益で希望のないシーシュポスの苦役を地で行っているのである。

メガマシンのもうひとつの側面は、先にあげた巨大政府のことである。現代の国家は、「安撫な政府」、「夜警国家」から積極的な「社会福祉国家」を経て、今日では強大な「産業国家」と化している。この産業国家を支えているのがテクノクラシーで、ガルブレイスは著書『新しい産業国家』のなかで、このテクノクラシー支配の構造を「テクノストラクチャー」(technostructure)とよんでいる。この支配を確立する上で有力な技術となったのが、IT技術とコミュニケーション技術である。

ルネサンスと近代とを分けたのが、活版印刷術、航海用磁針および火薬であった。このうち印刷術の登場が新しいタイプのライフスタイルを必要としたように、新しい社会は、新しいライフスタイルを必要とする。工業社会と工業後社会への転換の触媒となっているのが、コンピュータである。コンピュータを含む電子技術の発達は、社会を全面的に変え、新しいライフスタイルを人びとにもとめている。この新しいライフスタイルの転換の行なわれたのは、一九七〇年代のことであった。若者の反乱は、工業社会から工業後社会への転換期に起きた出来事であった。古いライフスタイルの持ち主は、自分たちの王国にケンタウロスの大群のように乱入する若者たちのライフスタイルは、理解の外にあった。古いスタイルの人びとは、「差し替え可能な活字」(movable type)のよう

に、典型的な (typical) な『組織のなかの人間』であり、スクエア（四角四面の人物）であるのに対し、新しいスタイルの若者たちはピスタター（新しがりや）である。この新旧のライフスタイルの対立は、まだ決着はついていない。

教育と社会

いずれにせよ、現代社会は、科学技術の発達に基礎をおいて「ゆたかな社会」をつくることには一応成功をおさめた。しかし、ユースクォークが問題を提起したように、物質的な豊かさだけでは人間の実存的な問題の解決には少しもならないことが、明らかにになったのである。『聖書』にもあるように、「人はパンのみにて生きるにあらず、神の口よりいじことばによりて生きる。」存在であるからである。

ここに改めて、現代的教養の意味が提起されなければならない問題の背景がある。近代合理主義を背景にする科学技術信仰は、いわば現時点で頂点に達している。前述のフロムのことばのように、科学技術は可能なことならなんであれその倫理的な意味を問うことなしに、実行してしまおうという傾向をもっている。核兵器を製造することが可能なら、ただちにその製造に着手するというように、科学技術は自己のオートノミーの論理にしか従属しない。テクネーは、テームス（正義）であるかどうかには関心がないのである。にもかかわらず、専門化・細分化の進行は、とどまるところがなく、それぞれの部分が自己主張を行なっているため、全体的な展望がない危険な事態が進行していくのである。

しかし、人類はいままでのとおり科学技術や経済成長の論理を承認したままでは、「この世の終わりの日」(Doomsday)を迎えてしまうで

ある。すでにレーチエル・カーソンは、『沈黙の春』（一九六二）を書いて、いままでのようにDDTを始めとする化学薬品の乱用をつづければ、花も咲かない鳥も鳴かない沈黙の春がくることを警告した。その後によってくるのは、いうまでもなく、人類の破滅である。

この書物の最終章でカーソンは、次のようにいう。

私たちは、いまや分れ道にいる。だが、ロバート・フロストの有名な詩とは違って、どちらの道を選ぶべきか、いまさら迷うまでもない。長いあいだ旅してきた道は、すばらしい高速道路で、すごいスピードに酔うこともできるが、私たちはだまされているのだ。その行きつく先は、禍いわざわいであり破滅だ。もう一つの道は、あまり「人も行かない」が、この分れ道を行くときにこそ、私たちは自分たちの住んでいるこの地球を守る。そして、それはまた、私たちが身の安全を守ろうと思うならば、最後の唯一ゆいのチャンスといえよう。

ギリシア語に分かれ道を意味する二つのことばがある。ひとつはκαστροφήで、もうひとつはanastropheである。前者は悪化する方向にいくことを、後者は良い方へ転化することをそれぞれ意味する。καστροφήが英語のcatastropheの語源になっている。stropheは転換を意味し、kataは下方、anaは上方をそれぞれ意味する。したがって、katastropheは下方への転換であり、anastropheは上方への転換である。いうまでもなく、われわれの選択は、後者でなければならぬ。

「この世の終わりの日」に対するのは「楽園回復」(Paradise Regained)である。人類は、禁断の樹の実を食べてしまった谷で、楽園を開放してしまった。人類の苦難はこのときから始まる。「楽園回復」というのは、人類の永遠の夢である。マルクス主義では、楽園は原始共

同体、楽園回復は共産主義社会に相当する。マルクス主義はもとも「楽園回復」の思想と運動であった。だが、こんにちではその実現を信じることは困難になっている。

ここでいう「楽園回復」とは、クリーンでリサイクル可能な生産システムを確立することである。「宇宙船地球号」の経済学(K・E・ポウルディング)は、「楽園回復」のために必要な提案である。また、「スモール・イズ・ビューティフル」(E・F・シューマッハ)などの提案もそうである。これらはいずれも、破局回避の提案である。

いずれにせよ、現代的教養は、以上のような社会的・技術的変動を前提として、検討されなければならない。

現代的教養と中世的教養

かつて、日本の大学のモデルとなっていた欧米の大学は、中世に端を発し、「大学は教師と学生の組合である(ウーニヴェルシタース・ソキエタース・マガストロールム・ディスキプロールムクニ)」というのが、その定義である。歴史的には、ユニヴァーシティということばは、ユニヴァース(宇宙)や学問の普遍性(ユニヴァーサリティ)とは、まったく関係がなく、学生と教師からなるギルドというようなことを意味していた。また、カレッヂというのは、もともとは「教師組合」のことをさしていた。

ヨーロッパの大学においては、中世以来の伝統が守られてきたものに、文法、修辞術、論理学の三学科(trivium)と算術、幾何、音楽、天文学の四学科(quadriuvium)とからなる七科目のリベラル・アーツ教育がある。これらのリベラル・アーツ教育は、職業教育(profession and

vocation education)とは分離され、そのあとに神学、医学、法学などの専門的職業教育が用意されていた。今日、リベラル・アーツは、人文学 (the humanities) と同意語となつてゐる。これはその教育の基礎が文学、歴史学および哲学などの教育にあるからである。

中世的教養は、一部エリートのためあるいは有閑階級 (レジャー・クラス) のためのものであった。それは職業生活の心配のない階層のものであり、今日の大衆社会ではそのままでは通用しない。それではどのようなプログラムが考えられるであろうか。それには、まず近代日本の出発点の時代状況から検討する必要がある。

明治初期の教育は、日本が「レート・カマー」(近代化に遅れて参加した国) であったから、当然のことながら西欧諸国の制度を導入せざるをえず、教育における欧化政策は、「殖産興業」、「富国強兵」のための必要条件であった。明治五年の文部省の学制發布の際の「被仰出書」^{おほせいだまがき}には、次のように書かれている。

人々自ラ其身ヲ立テ、其産ヲ治メ、其業ヲ昌ニシテ、以テ其生ヲ遂ル所以ノモノハ他ナシ、身ヲ修メ智ヲ開キ才芸ヲ長スルニヨルナリ。而シテ其身ヲ修メ智ヲ開キ才芸ニ長ズルハ学ニアラサレハ能ハス。是レ学校ノ設アル所以ニシテ、日用常行言語書算ヲ初メ士官農商百工技芸及ヒ法律政治天文医療に至ル迄、凡^{およそ}、人ノ営ムトコロノ事、学アラサルハナシ。能ク其才ノアル所ニ応シ、勉励シテ之ニ従事シ、而シテ後、初メテ生ヲ治メ産ヲ興シ業ヲ昌ニスルヲ得ヘシ。サレハ学問ハ身ヲ立テルノ財本共云ヘキ者ニシテ、人タルモノ誰カ学ハスシテ可ナランヤ。夫ノ道路ニ迷ヒ飢餓ニ陥リ家ヲ破リ身ヲ喪フ徒ノ如キハ、畢竟不学ヨリシテカカル過チヲ生スルナリ……(以下略)。(原文、正字、句読点なし)(明治五年八月三日、太政官布告第二百十四号)

現代的教養とは何か 正慶 孝

以上、この文書には、教育の必要性が的確にのべられている。身を修めることと智を開き才芸を伸長させることが、その生を遂げる(自己実現)ための重要な条件であることを明確にしている。ここで「智を開き」すなわち開智とは、教育を意味する education の最初の訳語であった。松本にある開智学校を始め開智学校という名の学校は各地にあった。教育は「教養育てること」であるのに対し、開智は「智を開くこと」である。おそらく、後者のはうが education の訳語としては、適切であると思う。

この文書は、同年に活版で上梓されていた福沢諭吉の『学問のすゝめ』を意識して書かれたものである。福沢は、この著書の冒頭で次のようにのべている。¹⁴

天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言へり。されば天より人を生ずるには、万人が万人皆同じ位にして、生まれながら貴賤上下の差別なく……………。

賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに由^よって出来^いるものなり。

この有名な文章によって、福沢はこの書物の洛陽の紙価をたかからしめた。しかも、福沢のいう学問とは、それまでの学問観とはまったく異なっていた。福沢は次のようにいう。

学問とは、ただむつかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を樂しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を言うにあらず。……………
…専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。¹⁵

福沢は実学の例として、「いろは四十七文字」「手紙の文言」から「地

理」「歴史」「経済学」「修身学」などをあげ、初編の結論として次のようにのべている。⁽¹⁶⁾

この心得ありて後に士農工商各々その分を尽し、銘々の家業を営み、身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきなり。

おそらく、こんにちにおいても市民的教養として、福沢のいう実学は重要である。手紙の書き方も重要であるし、地理や歴史の知識も必要である。ただし、古文を読むことも、和歌をつくることも同じように重要である。これらの知識が実のない学問であるとは、けっして思われない。福沢は、あくまで挑戦的に「世上に実のない文学」を敵視するポーズをとったのである。福沢の主張は、閑文字を役に立たないものとして斥けたのである。

ふたつの文章を比較してみると、前述の文書が福沢の主張にいかにか影響されているか、明白であろう。福沢も文部省の文書も独立した人格として生活を営み、だれに迷惑もかけずに自らの生をまっとうしなさい、そのためには、学ぶことが肝要なのだといっているからである。

約百三十年前に書かれたふたつの文書がいまもなお、新鮮な印象をあたえるのは、現代的教養の本質と主要内容とが含まれているからである。その第一は、かつては教養とは一部の読書人階級のものであったのに対し、これらの文書は士大夫のものから知識や教養を解放し、だれでもが学べるあるいは学ばなければならぬ教養の必要性を提示したことである。福沢のいう実学とはたんなる知識のための知識あるいは学問のための学問ではなくして、行動を正しく導くための学問であった。それはそれまでの読書人階級のいう学問とは、真正面に対立するものであった。実の反対語は虚であるから、士大夫の学問は虚学であるというのが、福

沢の主張である。

たとえば、福沢は、『学問のすゝめ』の第二編でこんなこともいっている。⁽¹⁷⁾

我邦の古事記は暗誦すれども今日の米の相場を知らざる者は、これを世帯の学問に暗き男と言ふべし。經書史類の奥義には達したれども、商売の法を心得て正しく取引をなすこと能はざるものは、これを帳合の学問に拙き人と言ふべし。……これらの人物は唯これを文字の間屋と云ふ可きのみ、其効能は飯を喰ふ字引に異ならず。国のためには無用の長物、經濟を妨る食客と言うて可なり。

これは徹底した実学主義である。それまでの士大夫の学問は、主として儒学とよばれる学問である。古学も国学もあるけれども、ここではステーツマンの学問として要請されてきた儒学を考えるのが適当であろうから、儒学を中心に考えることとする。福沢自身も儒学を学びそののち蘭学に転じている。かれは『福翁自伝』のなかで、儒学を嫌いである、とのべている。それは儒学は、封建制そのものの教えであると、福沢が考えていたことによる。「門閥制度は親の仇でござる。」といった福沢としては、封建イデオロギーとしての儒学が容認しがたかったのは当然のことであった。

しかし、儒学が非合理的な学問であったかどうかについては、問題がある。孔子は「われ、怪力乱神を語らず。」とのべている。またかれの学園の教科目が「礼、楽、射、御、書、数」の六芸を教えたことからも容易に想像できるように、孔子の学派の主張は、けっして非合理的でも不合理的でもなかった。孔子のことに「文質彬彬而君子」がある。これは質は素朴な実質を、文はこれを文化的に進化したものを、

それぞれ意味している。文化的なものが生活の実質と遊離しないで営まれることが人間的であるというような意味である。きわめて常識的な主張といえるであろう。

徳富蘇峰がいみじくも述べているように、孔子は「大いなる常識家であった。彼は制欲的のストアでもなく、また享樂的のエピキュリアンでもなく、制欲の必須には制欲し、享樂の機会には享樂する。いずれとも偏倚せざる、極めて自由の立場を占めたる、臨機応変者」(『読書法』)であった。⁽¹⁸⁾ここ十数年前から「新儒学」という形で儒学の研究が再び復活し熱心な研究がなされているように、また、儒教文化圏の経済発展が注目され、欧米の学者から儒教倫理と資本主義の精神に関する関心が強まっていることから分かるように、儒教はけっして古臭い封建イデオロギーとして捨て去ってよいものではないのである。

実学的教養の重要性

明治初期の近代化と実学の関係は、前述のとおり、極めて実学的ではあった。その後、国権主義の拡大によって、欧化主義的な実学主義が後退していったのは、よく知られているとおりである。

ところで、現代の高度技術社会あるいはグローバル化が急速に進行している状況のなかで、現代的教養はどのようなものでなければならぬであろうか。現代的教養は、現実の困難な問題と取り組みその解決のために有益でなければ何の価値もないけれども、そのためにはどのような条件が必要であろうか。

その第一は、「世界のなかの日本」の認識である。今日でも小・中・高などの運動会ではしばしば万国旗が飾られる。日本における学校の運動

会は、明治の初年に海軍兵学寮で行なわれたのが最初とされる。体育は身体教育の略で、その一環として運動会が兵学寮で開かれたのである。将来の海軍士官を養成する軍学校で運動会が始まったことは、騎馬戦や棒倒しのようなミリタリーな種目があることから、直ちに理解できるであろう。相当早い時期から運動会の際には、万国旗が装飾としてかざられたのである。出場したり退場したりする門は、さしずめ凱旋門である。装飾として飾られている万国旗は、常に「世界のなかの日本」を認識させる上で重要な役目を果たした。グローバル化が進行しているこんにち、この認識はいっそう重要である。

第二は、実学的能力の涵養である。実学は、おそらく「实际的」(practical)の「実」、「現実的」(real)の「実」、あるいは「実証的」(positive)の「実」など多様な「実」を意味することばである。ここではその実学のうちの一部である、現実理解能力にかんする教養を取り上げてみよう。

現実を正確に理解する能力をもつことは、教養教育のうち重要な位置を占めている。世界は暗号にみちみちているので、この暗号を解読する能力は、今後ますます重要になってくる。時事問題の理解にあっても、政治、経済、国際政治、科学技術等々、記事の理解には相当程度の基礎知識を必要とする。世界の出来事が複雑になっていくから、専門家でないければ接近できないような複雑な記事が少なくなない。それぞれの分野のターミノロジーも難しく、理解するのに一定の基礎知識を必要とする。福沢の例をあげれば、『古事記』を暗唱していても、米の相場を心得ていなければ少しも教養があるとはいえない。それは現代においては生活者としての教養が優先するからである。

第三に科学技術的教養が必要である。科学技術の急速な展開のため、これにおいつけない人びとが多数でている。前述のアルビン・トフラー

は、未来の「早期到来」によって生じる現象を『未来の衝撃（フューチャー・ショック）』となづけたが、そのショックに打倒されないために、科学技術の問題に正しく対応できるようにしておく必要がある。これは科学的な教養の必要なことを意味する。オーギュスト・コントがのべているように、科学的であることは実証的であることと同じである。特に最近の科学技術の変化には著しいものがある。たとえば、電光石火というようなジャーナリスティックな言い方がある。これは電 (electrics) 、光 (optics) 、石 (ceramics) 、そして火 (atomic energy) の四つの科学技術のことをいう。これらの分野での発達は瞠目的である。その上、遺伝学 (genetics) 、新素材 (new materials) などの分野で革新的な科学技術が現われている。また、知的技術の分野では、複雑系の研究もさかんである。前述したように、工業後社会の進展に伴い、科学技術の知識や理解はいっそう重要になっている。科学史や科学哲学あるいは科学技術の基本的知識は不可欠である。前述したリベラル・アーツとメカニカル・アーツがほどよくバランスがとれている必要がある。

第四に古典的教養の必要性である。古典のことを英語ではクラシックス (classics) と言う。これはクラスのなかの最良のものという意味である。クラスは時代でも国でもまたジャンルでもよい、それぞれの分野で最良のものという意味のことがクラシックスなのである。いずれにせよ、クラシックスの学習は必須科目である。

古典はつねに新しいものの発想の根源であるし、また人生を豊かにしてくれる滋養の泉でもあるからである。哲学ひとつとってみても、現代哲学はプラトンのフットノート（脚注）を書いているにすぎないなどという発言もあるように、古典は知性の回帰点でもある。古典的教養は根底的なものである。

しばしば読書論でいわれるように、再読三読するに値する書物は古典しかない。先にあげた『古事記』も、現代の状況に應用できるような読み方をする事ができれば、これも重要な実学的教養である。知ることが行なうことにつながれば、それは実学的教養であるからである。福沢の批判したのはたんなる「読書人」のことであって、その種の人物は「論語読みの論語知らず」のことにほかならないからである。虚と実の区別は、その知識の利用法に関することであって、その知識そのものに存するものではないことに注意すべきであろう。虚実は皮膜の間に存するのである。

第五に全体のなかの関連のなかで個々の物事を判断できるように、教養を体得することである。前述の新渡戸は、講演や啓蒙的な著書のなかで「釣り合いのとれた感覚」(sense of proportion) と「物事の把握」(grasp of things) の重要性を説いている。これは全体と部分との関連をつねに念頭において物事を判断することを強調したものである。このことは冒頭のことばに関連する主張で、専門家 (specialist) と総合家 (generalist) の対立をこえて、何事かの専門家であるとともに、人間・社会・自然の全般にわたって総合的な判断のできる人であること、これが教養のエッセンスであることをのべたものである。要するに、全体的論 (holism) 的な見方を修得することが必要である。このことが「文化的理解能力」(cultural literacy) を高める基本である。

現代的教養と知的生活

現代社会は、すでにのべてきたように、科学技術が社会変動の第一原因であるかのごとくみられている社会である。Z・プレゼンスキイの

『電子技術時代』を始めとして「テクノポリタン」(技術至上主義)の主張が、政策決定や目標設定の場合の当然の前提とされている。これには、体制擁護派も反体制派の対立もないかのごとくである。唯物論でもなく唯心論でもない、技術史観が現代社会においては、支配的である。

しかし、技術史観でなにごとも説明できるといふ考えは、誤謬であり傲慢であり危険でもある。それは精々不易流行のうちの流行に属している事柄に過ぎない。教養の基本は、あくまで人間に対する深い理解と洞察である。伝統的な言い方をすれば、ヒューマニティーズ(the humanities)が教養の基本でなければならぬ。しかも、それは知識としてのそれではなく、行動する知性としてのそれである。

それでは、行動する知性とは何か。それは自己責任原則で行動する知性のことである。ここで思い出されるのは、明治の初年代に福沢の『学問のすゝめ』と並んで江湖の青少年を魅了した敬宇中村正直の『学問のすゝめ』(サミュエル・スマイルズ原著、明治四年刊)である。

この書物は、福沢の知に対し、徳の面で明治の青少年に影響を与えたとされる書物である。その冒頭には、「天はみずから助くるものを助く」といふピュリタンの愛用するフレーズが掲げられている。

福沢以上に学があり、また人徳もあつたといわれる正直太夫によって訳されたこの書物が、明治の精神にどれほど影響をおよぼしたか計り知れないものがある。この書物は、みずからの努力によって人生が開けるという力強いメッセージの書であった。これにアメリカ人ウィリアム・クラークの「少年よ、大志を抱け!」が、さらに、『小学唱歌』のひとつ「仰げば尊し」の「身を立て、名をあげ、やよ、はげめよ」(明治十七年)がつづいた。明治の精神はここで決定的になったのである。学習することが行動することに連結したのである。これが大正教養主義の時

代までつづく。

しかし、この行動する知性にも問題がなかったわけではなかった。それは功利主義的な立身出世主義とむすびついていたことである。

そこで、その種の反省の上になつた行動する知性とは何か、問われなければならない。林語堂は、『人生をいかに生きるか』のなかで、こんなことをのべている。²⁰⁾

教育または教養の目的は、知識のうちに見識を養い、行為のうちに良徳をつちかうにある。教養のある人とか、または理想的に教育された人とは、かならずしも多読の人、博学の人の謂いではなく、事物を正しく愛好し、正しく嫌悪する人のことである。

何を愛し、何を憎むべきかということを知っているのは、見識のあることを意味する。

ここで強調されているのは、見識または鑑識のことである。知識は事実や報道の単なる詰込みの問題であるが、「見識または判断力は芸術的判断の問題」であると、林語堂はいう。世のなかには、たくさん知識の詰まった人はいらぬ。けれども、問題を正しく把握し、その解決のために何が必要か、どんな手段が求められているかを判断できる人となると絶望的に少なくなる。これは勇氣とも関係があるからである。林語堂はつづけてつぎのようにいう。²¹⁾

教育ある人とは、ゆえに愛憎の正しい人のことである。これをわれわれは見識と呼ぶ。見識には魅力がある。見識または判断力をもつには、ものごとを徹底的に考える能力、判断の独自性、社会的、美術的、学究的、およそいかなる方面の欺瞞的威嚇にも屈せざる毅然たる態度がある。

……

ところで、見識は勇氣と不可分のものである。現に中国人は、つねに「識」と「胆」^{たん}とを関連させている。勇氣すなわち判断の独自性ということは、われわれの知っているとおり、実に稀^{まれ}にみる美德なのである。後年名をなした思想家や文人は、幼年時代からみな知性に勇氣があり、その独自性を失わなかった。

行動する知性で十分ではなく、勇氣ある知性でなければほんとうの知性とはいえないのである。理非曲直を明らかにしなければならぬとき、何の発言もでてこない知性はあるいは教養は、モンテーニュ流にいうと、「よく詰まった頭脳」の知性であり、胆のある知性は「よく働く頭脳」からでてくる教養である。この両者は似て非なるものであり、われわれが現代社会に求めている教養は、いわずもがなのことであるが、後者のような知性でなければならぬ。

「豊かな視野」と「未来志向」

すでに明らかにしてきたように、勇氣ある知性の涵養が教養の意味であった。教養という語句は、明治後期から使われだしたようである。教育と修養の二語を合成したことばで、大正時代には大流行し、ドイツ語の Bildung の訳語としても用いられた。大正教養主義などの表現が生まれた。昭和に入ってから大東亜戦争勃発のころまでは流行した。その頃の代表的な著書である河合栄治郎らの「学生と教養」シリーズは、ベストセラーであった。戦後もその余燼はくすぶっていた。このシリーズは、今日の知的生産とか知的生活の原型となっている。

しかし、われわれが求めている教養というのは、胆力のある「よく働く頭脳」のことであり、さまざまな問題に最適解をだすことのできるタフな頭脳のことである。さきあげた条件のほかに二三、付け加える必要がある。前述したように、世界はさまざまな暗号にみちている。エクспリシットなものもあればインプリシットなものもある。前者はどちらかというと解読しやすい。問題は後者である。ルネ・デカルトは、「私は万巻の書物を読んだ。これからは世界という書物を読み旅に出かける。」⁽¹⁾と書いて、旅に出た。そして、『方法序説』を旅先のドイツで書いたのである。「世界という書物」を読むためには、インプリシットなものを読みなければならない。そのためには、「豊かな視野」(broad in scope) と「未来志向」(future-oriented) の二つが必要である。この能力にすぐれていたのが、二宮尊徳であった。かれは「天地を経文として」⁽²⁾生きた人である。日本最初の経営コンサルタントであった、彼は書物からではなく、自然を含めた世界から学んだのである。本当の教養とは、「天地を経文」として、「世界という書物」を読めるひとでなければならぬであろう。日本の教育は、「レート・カマー」であったために、どうしても「よく詰まった頭脳」を育成することを優先してきた。テクノクライト優先の教育である。そのため、重要な転換点で判断の過ちをおかすことが少なくなかった。今後の教育あるいは教養は、「テレオクライト」(未来を見通すことのできる人) のためのものでなければならぬ。

注

- (1) 猪狩史山・中野刀水『杉浦重剛座談録』(岩波文庫、一九八六年)。
 (2) カッテンディーケ『海軍伝習所の日々』(水田信利訳、平凡社東洋文庫②、一九七

- 三年)。
- (3) ゲーテ『ファウスト』(森林太郎訳、岩波文庫、一九二八年)。
- (4) J・リフキン『エントロピーの法則』(竹内均訳、祥伝社、一九八二年)。
- (5) 同右。
- (6) 同右。
- (7) C・P・スノー『二つの文化と科学革命』(松井卷之助訳、みすず書房、一九六七
年)。
- (8) 同右。
- (9) エーリッヒ・フロム『希望の革命』(改訂版)(作田・佐野訳、紀伊国屋書店、一九
七五年)。
- (10) ダニエル・ベル『脱工業社会の到来』(内田ほか訳、ダイヤモンド社、一九七五年)。
- (11) T・ローザック『対抗文化の思想』(風間訳、ダイヤモンド社、一九七五年)。
- (12) ルイス・マンフォード『機械の神話』(木原ほか訳、河出書房新社、一九七八年)。
- (13) レーチェル・カーソン『沈黙の春』(青樹訳、新潮文庫、一九九一年)。
- (14) 福沢諭吉『学問のすゝめ』(岩波文庫、一九九三年)。
- (15) 同右。
- (16) 同右。
- (17) 徳富蘇峰『読書法』(講談社学術文庫、一九九三年)。
- (18) A・トラー『未来の衝撃』(徳山訳、角川文庫、一九七六年)。
- (19) 林語堂『人生をいかに生きるか』(阪本勝訳、講談社学術文庫、一九七九年)。
- (20) 同右。
- (21) 同右。